

夏合宿勉強会

2001年9月3日 担当：長橋明子

大塚英志「サブ・カルチャー文学論」

1. はじめに

「サブ・カルチャー文学論」は、雑誌『文学界』98年5月号から2000年8月号まで断続的に連載されてきた文芸評論です。サブ・カルチャーを軸に戦後日本の小説・小説家を縦横無尽に論じたこの原稿は、大塚英志氏の批評活動における主著と言ってよいのではないのでしょうか。連載13回を迎えた現在、残念なことに連載が中止され、出版の予定もないそうなのですが、ここでは主に「サブ・カルチャー文学論」における問題意識を取り上げ、今後の勉強会への布石みたいな感じになればいいと思います。

2. サブ・カルチャー化する文学

江藤淳は78年11月、<小説がカルチュアの座から顛落し、サブ・カルチュアに低迷しつつあるという感を、ますます深くせざるを得ないのは遺憾である>と記し、20年間続けてきた文芸時評の筆を置いた。この直接のきっかけとなったのは、76年にデビューした村上龍の「限りなく透明に近いブルー」であるが、これの前後に新人賞の選考にあっていた江藤がサブ・カル化する文学を嘆く節があったことは明らかである。

同時期に文学のサブ・カル化に直面して自らの選考基準を下げた吉本隆明とは対照的に、江藤淳はあくまで「保守」の立場を守ってきた。だが、単に文学へのサブ・カル流入を拒否するのではない。江藤にとって小説が「サブ・カルチュア化」していくことは不可避の事態であり、それを受け入れた上で、「許せるサブ・カル」と「許せないサブ・カル」との線引きを行ったことの重要性を大塚は指摘する。

この「サブ・カルチャー文学論」は、大塚自身が江藤淳論として書いたと言明するように（「追悼 江藤淳 『母を崩壊させない小説』を探した少年のために」(『文学界』99年9月号参照)）常に江藤の線引きの基準へ言及している。それは、江藤淳が拘泥し、そして断念した作業を継承しようとするものであると言えるだろう。つまり<目前にくり広げられる文学現象を歴史化していく作業を断念した後の戦後文学史を、サブ・カルチャーの側から記述すること>（「サブ・カルチャー文学論 第一回」）である。この歴史化されなかった戦後空間を歴史化する、という志向は『「彼女たち」の連合赤軍』（2001、角川文庫）にも見られ、大塚氏が一貫して持ち続けてきた問題意識である。

3. 私たちの世代と戦後民主主義

大塚英志が文学の場面でこのようなことをやろうとする意図は、大文字の「文学」が解体してしまった以降の世代、つまり80年代以降に生まれ育った私たちにとって非常に興味深いと思う。「文学」が壊れてしまった状態が普通だったのだから、「文学」を壊すこと以上に、「文学」的な形式を復権させようとするのはごく簡単なことだ。浅田彰が平野啓一郎の小説を「二十世紀後半の文学は、なかったことになっている」かのように古典的な「文学」を踏襲していると指摘する。

この、何事もなかったかのように古典的な、いかにも「文学」が復古するというのは平野啓一郎の小説が何であったかを正確に言い当てていて興味深い。...何というかぼくたちの年代から見ると、とうに壊れてしまったはずのものが実に屈託なく復活している、という事態がたった今、文学において起きているらしいことがわかる。...問題なのは復古そのものよりもむしろ、一度それが壊れてしまったはずなのに、という前提がすっぱり抜け落ちていることにある。

(大塚英志「戦後民主主義のリハビリテーション」『戦後民主主義のリハビリテーション(論壇でぼくは何を語ったか)』2001, 角川書店)

話題は多少それるが、大塚英志が自分を「大衆」の身体を持った者として戦後民主主義を肯定しようとすることに對しても、同じような「世代の差」を感じる。「愛/闘争/掲示板」で議論になったように戦後民主主義は私たちが生まれた時点ですでに所与のものとしてあったわけで、それを原理として掲げるには実感として「当たり前」すぎるのだ。その違和感を「世代の差」と言い捨ててしまわずに、大塚の肯定する戦後民主主義について私たちが考えることは可能だろうか？

3. <全体>を欠いたサブ・カルチャー

話を戻しましょう。

前述したような意味で、20年前に江藤淳の感じた<文学のサブ・カルチャーへの転落>は正直言って今の我々にはピンと来るものではない。サブ・カルチャーと=下位文化に対する上位文化、もしくは全体文化というものが今や想定できなくなっているからだ。かつて「文学史」という名のもとに一つの全体を構成していた大文字の「文学」は解体し、以前はカウンター・カルチャーにすぎなかったサブ・カルチャーが全体を代行していると大塚は指摘する。

だが、サブ・カルチャーとは全体を代行するほど堅固なものなのだろうか。「オウム」や「エヴァンゲリオン」に対する熱狂には、失われた全体性を希求した結果、ありもしない枠組みを無理やり作り上げてしまったような病的なものを感じられはしまいか。

このような事態は、サブ・カルチャーがこれまで依拠していた「全体」の中の部分、という安定した位置を失ったために起こった事態と言える。大塚は次のように述べる。

ぼくはサブ・カルチャーの人間としてサブ・カルチャーが不用意に全体を代行しようと欲することに強い危惧を抱くが、しかしそれでは「全体」へと崩れていく回路はいかにしたら絶つことができるのか。その上でサブ・カルチャーはサブ・カルチャーである自分をどう定義づければいいのかのだろうか。

(「サブ・カルチャー文学論 第一回」)

大塚英志のもう一つの問題意識はこれである。

4. 文学は自立できるのか？

では、「サブ・カルチャー化する文学」的状况において、文学はいかに文学でありうるのか。あるいは今回の講演会のテーマに即して言うならば、「マンガの利潤で文芸誌の赤を埋める」状况にある文学が表現・経済両面での自立をはかることは可能なのか。大塚英志のやっていることが、サブ・カルチャー側に行ってしまった小説を文学の側に再び引き戻すことであるとすれば、それは経済的なものとどう折り合いをつけることができるのか。

資料 サブ・カルチャー文学論の掲載号とタイトル

- 第一回 江藤淳と少女フェミニズム的戦後 『文学界』98年5月号
- 第二回 村上春樹の「月並みさ」 『文学界』98年6月号
- 第三回 まんがはいかにして文学であろうとし、文学はいかにしてまんがたり得なかったか 『文学界』98年8月号
- 第四回 村上春樹はなぜ「謎本」を誘発するのか 『文学界』98年10月号
- 第五回 吉本ばなな論、あるいは記号的な日本語による小説の可能性をめぐって 『文学界』98年12月号
- 第六回 庄司薫とサブ・カルチャー文学の起源 『文学界』99年2月号
- 第七回 幻冬社文学論、あるいは天に唾する小説のあったはずの可能性 『文学界』99年4月号
- 第八回 移行対象文学論、あるいは山田詠美と銀の匙 『文学界』99年6月号
- 第九回 「ルパン三世」的リアリズムとキャラクターとしての<私> 『文学界』99年8月号
- 第十回 「物語」と「私」の齟齬を「物語」ということ ―川上弘美論 『文学界』99年10月号
- 第十一回 赤坂真理―文学の「不完全自殺マニュアル」としての小説 『文学界』99年12月号
- 第十二回 蜂蜜パイのように甘い「お話」をけれども今は肯定するべきだということについて - - 村上春樹と車谷長吉 『文学界』2000年6月号
- 第十三回 三島由紀夫論、あるいはあらかじめそこにあり、そして終わったディズニーランドについて 『文学界』2000年8月号